

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2017年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション 研究科 異文化コミュニケーション 専攻		
研究代表者 (2018年3月現在のもの記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程後期課程2年	福田 晶子	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 教授	高橋 里美	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題	日本人 EFL 学習者による自己調整学習の変移		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2018年3月現在のもの記入	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程後期課程2年	福田晶子	
研究期間	2017 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 98,878 円 / (採択金額) 100,000 円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度の研究目的は、(1) 自己調整学習 (self-regulated learning, SRL) に含まれる要因間の関係性を明らかにすること、(2) 日本人 EFL (English as a Foreign Language) 学習者による SRL の変化過程を明らかにすること、(3) 日本人 EFL 学習者の SRL 能力を測定する質問紙を作成することであった。(1) では共分散構造分析を用い、学習者の情意要因が熟達度に与える影響に着目して因果関係を探った。(2) では、博士論文の事前調査として行われ、学習過程の追跡を通して、自主学習における SRL がどのように変移するかについて、インタビュー調査を実施した。(3) では、既存の質問紙を英語自主学習環境に特化した項目に修正を施し、因子分析を用いて信頼性および妥当性を検証する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 自己調整学習 } { 英語自主学習 } { トラジェクトリ研究 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度は、以下 3 点の研究課題に関する調査及び研究を行った。

(1) 自己調整学習 (SRL) の要因間の関係性についての調査**【研究課題と目的】**

SRL は、学習者が自身の情意的活動および認知的活動を自ら監視・制御しながら、能動的に学習を進める過程を指し (Pintrich, 2000)、その特徴は、学習者の情意面および認知面を包括的に検討することを可能にする点にある。SRL 自体が熟達度に影響を与えることは先行研究から明らかになっている一方、その情意面と認知面が熟達度にどのように作用しているのかについては、議論が分かれている。そこで、本研究では共分散構造分析を用い、要因間の関係性を探ることを目的とした。

【方法】

〈データ〉大学生 97 名 (女性 68 名、男性 29 名) から得られたデータを分析に用いた。彼らは Motivated Strategies for Learning Questionnaire (MSLQ; Pintrich et al., 1991) に回答しており、そのデータが本分析に使用されている。

〈分析〉共分散構造分析を用い、熟達度を外生要因とし、①動機づけ要因が熟達度に直接的な影響を与えるモデル、②学習方略要因を介して間接的な影響を与えるモデル、③直接的かつ間接的に影響を与えるモデルの 3 モデルを比較し、検討した。

【結果】

分析の結果、動機づけ要因から熟達度への有意なパスは見られず、熟達度は学習方略要因からのみ、有意なパスを得た。つまり、動機づけ要因が学習方略要因に影響を与え、学習方略要因が熟達度に影響を与えることが明らかとなり、最終的に②の仮説モデルを支持する結果となった。

【今後の展望】

本研究で用いた質問紙は、一般的な SRL 志向を聞くにとどまっており、被験者は自身のすべての英語学習経験 (様々な年代、受験や資格試験など) に照らし回答した。そのため、特定のコンテキストの SRL を対象とした場合、同様の結果が得られるかは検討する必要性があるだろう。また、情意面と認知面の作用には、個人差が関わっている可能性があるため、適性処遇交互作用などの分析を用いることで、新たな知見が得られると考える。

(2) 自主学習における SRL の変移についての調査**【研究課題と目的】**

これまでの SRL に関する質的調査の多くは、学習成功者を対象とし、英語学習開始時点から現在までの学習ヒストリーを作成し、英語学習における転機や分岐点に着目した研究が主流であり (例えば、吉田, 2012)、現時点の学習が将来的にどのように変化していくのか、その過程を追跡するという視点からのトラジェクトリ調査はほとんど行われていない。そのため、一定期間にわたり学習者を質的に追跡することで、SRL の詳細な変化をミクロな視点から明らかにできると考え、本調査が行われた。

【方法】

〈被験者〉当該調査は大学 4 年生 3 名 (すべて女性) からの協力を得て行われた。彼女らの専攻は、それぞれキリスト教学、法学、コミュニティ福祉学である。熟達度は下中級レベルであり、コミュニティ福祉学専攻の協力者のみ、過去に 2 週間の留学経験があるが、他 2 名に留学経験はない。

〈調査方法〉協力者は、7 月末から 9 月末までの期間、オンライン学習教材を使用して自主学習を進め、調査者はおよそ 2 週間に 1 回のインタビューを通し、学習過程を追跡した。インタビューでは、協力者は、前回までの学習の反省や感想を自由に語り、また、次のインタビューまでの期間における目標を設定するといった活動を行った。また、学習ログを用い、学習内容や学習場所・時間といった情報を報告させ、学習の手ごたえやモチベーションを 10 段階で自己評価させている。協力者は全体で 5 回のインタビューを受けており、すべて 1 時間程度で実施された。また、初回のインタビューと最終回のインタビ

研究成果の概要 つづき

ューでは、MSLQを実施しており、同時に SRL 能力の数値化を試みた。

〈分析〉インタビューデータはすべて書き起こされ、質的分析法を用い、セグメントごとにコード化し、分類する。現在も分析は継続されている。

【結果】

当該調査は分析段階にあるが、学習者の SRL の変化には以下の傾向がみられた。学習者は、SRL に関する一切の指導や助言を受けていないにも関わらず、学習の反省の機会を与えられることで、おのずと、より具体的かつ達成可能な目標を設定するようになった。しかし、学習者によって、自主学習に対する満足度は大きく異なっており、目標設定に関わる動機づけの違いが強くかかわっている様子が見られた。学習ログを用いた自己効力感と動機づけの 10 段階評価では、いずれの学習者も 2 か月間の中で大きな変化は見せなかったが、彼らの情意的状態が効果的な認知的活動に影響を与えている可能性があることは言えるだろう。

【今後の展望】

当該調査は博士論文の本実験のために行われた事前調査であり、反省点を踏まえ来年度の本調査へと移行する。

(3) EFL 学習者の自主学習における SRL 能力を評価する質問紙の作成**【研究課題と目的】**

SRL は教育心理学の分野で発展してきた概念であり、学習一般に適用可能である。しかし、言語学習における SRL は必ずしも他教科と一致しているわけではない (Oxford, 2017)。また、言語学習は、教室環境下のみならず、自主学習の量および質によってその成果は大きく異なると言われている (廣森、2015)。EFL 学習者の自主学習における SRL の必要性を鑑み、それを評価することができる質問紙の作成を試みた。

【方法】

〈質問紙の作成〉MSLQ を基盤とし、項目の変更や削除を行った。

〈調査方法及び分析〉現段階では大学生を対象に、質問紙の回答の協力を呼び掛けている。昨年度に協力を募った学生からの回答はすでに終了しているが、実施する統計的処理の関係上、150 名近くの協力が必要であるため、来年度も引き続きサンプル数を増やす。

十分な回答数が得られたのち、探索的因子分析・確証的因子分析を用いて項目の整理を行う。最終的に得られた項目と因子をもって、日本人 EFL 学習者の自主学習における SRL を測定する質問紙として、本実験にて使用する。

【今後の展望】

データ収集を春学期中に完了し、因子分析を行い、質問紙の最終的な完成を目指す。

【参考文献】

廣森友人 (2015) 英語学習のメカニズム—第二言語習得研究にもとづく効果的な勉強法。大修館書店。

Oxford, R. L. (2017). *Teaching and Researching Language Learning Strategies. Self-regulation in Context*. Second Edition, Routledge.

Pintrich, P. R. (2000). The role of goal orientation in self-regulated learning. In M. Boekaerts, P. R. Pintrich, & M. Zeidner (Eds.) *Handbook of self-regulation* (pp. 451-502). San Diego: Academic Press.

Pintrich, P. R., Smith, D., Garcia, T., and MacKeachie, W. J. (1991). *A Manual for the Use of the Motivated Strategies for Learning Questionnaire (MSLQ)*. The Education Resources Information Center (ERIC).

吉田ひと美 (2012). FL 環境の日本人英語学習成功者の学習経験トラジェクトリー—自己調整学習の観点から—。大阪大学大学院言語文化研究科博士学位論文。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

Fukuda, A. (2018). Examining the Relationship between Self-Regulated Learning and EFL Learners' Proficiency. 『異文化コミュニケーション論集第 16 号』 pp. 17-31.

Fukuda, A. (under submission). The Japanese EFL Learners' Self-Regulated Language Learning and proficiency. *The Journal of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics*, 22(1).

④ その他

Fukuda, A. Examining the relationship between the components of self-regulated learning and English proficiency: A structural equation modeling approach, The 5th International Language In Focus Conference, Thessaloniki, Greece (May, 2018).

Fukuda, A. How Japanese English as a Foreign Language Learners Can Change Their Study Habits: An Analysis of Self-Regulated Learning, The EuroSLA Conference 28, Münster, Germany (September, 2018, under submission).